

j: ドリス、先日は突然の出会い、そしてマイケルと面識があるという事がいかに凄い巡り合わせだったかをひしひしと感じたわ。では早速質問をさせてもらうわね。バイクの免許を取ってどのくらい?
D: 18歳で免許を取って、19歳で最初のバイクを所有し、もうすぐ50歳になるから…。30年くらいね。
j: 現在の所有バイクを教えてください。
D: 今はBMW R100GS、そしてBMW F650 DAKAR。

j: なぜバイクの免許を取得しようと思ったの?
D: 私の人生で、自分に疑問を抱くことはしない、ただそうだったしそうするべきだと思っているの。当時付き合っていた彼と姉がバイクの免許を所有していたわ。彼にバイクの免許を取得したいという事を相談したら、「危ないからダメだよ」と言われたんだけど、「あなたは乗ってるじゃない」と言い返したの。そしたら彼が「だって僕はどうやって乗るか知ってるから」って言うのよ!「じゃあ、私も学ぶわ」ってね。ドイツでは多くの親は子供の安全を考慮して車の免許ですら取得することを勧めない人もいる。私の両親はそうではなかった。知らないよりも、より多くを知っている方がいいと。バイクの乗り方ってそのうちの一つ。数学だって、何だってね。必要ならば取得しなさい、取得して必要ないと思ったら使わなくてもいい。そういう考え方の両親に育てられたわ。そうは言っても、両親はお金は出してくれないから、やりたいことは全て自分の経済力でやることになったけどね。

j: とても素敵なお両親ね。貴方が勇敢なのが理解できるわ!
D: バイクに乗り始めた当初は、KAWASAKI Z650に乗っていたわ。彼が「自分でバイクを起こせないでしょ?」と聞いてきたから「もちろん起こせるわよ」と言ったわ。当時は何も知らなかったから、彼がバイクを地面に倒した状態から「じゃあ、これを起こしてみて」と私を試したの。多分彼は、私がバイクを起こせないと思っていた、かつ、バイクに乗らないように仕向けようとしていたんだけどね。「Strong will can move mountains(強い意志さえあれば何だってできる)」という表現があるんだしね。バイクを起こしてやったわ! そしてそこから本格的にバイクに乗り始め、魅せられていき、初めてのADVライディングはアメリカへ渡った。父親の兄弟姉妹がアメリカに居たから。当時私は23歳だったわ。



アラスカの雪道を走るドリス。座右の銘は「Is there anything else? (そこには他になにがあるの?)」彼女は好奇心が旺盛で、とにかくライディングが好き。そして人間に興味津々。「バイクにまたがっていることが私の生活」と話した

j: アメリカでADVライドをした時、バイクはどうしたの? 輸送、それともアメリカでレンタルしたの?
D: アメリカでHONDAのShadow 700を購入したわ。アメリカを横断した後ドイツに戻り、仕事をしてお金をためて、BMW R1100GSを購入した。そしてオーストラリアへ6か月のADVライドに出かけたわ。その後またドイツに戻り仕事をして、次はアフリカへ7か月、アフリカ大陸を北から南に縦断してね。それからまたドイツに戻り仕事をしてお金をためて、次はロシアから韓国まで渡り、韓国のライダーズクラブのアレンジにより、北朝鮮もADVライドしたわ。
j: え〜!!! 北朝鮮も走ったの!? 凄い!
D: 韓国と日本が近かったから「日本にも行かなきゃ!」って思ってね。それは2001年だったんだけど、アフリカをADVライドした際に出会った日本人ライダーに連絡を取って、フェリーで日本へ渡り、彼らの元に滞在させてもらったの。帰路は日本からドイツまでバイクを輸送、そして自分の片道フライトチケットを買わなくちゃいけないんだけど、日本は全ての物価が凄く高かったから、悩んだ末、来た道をまた戻ればいいやと思って、フェリーに乗ってロシアを横断してドイツに戻ったの。同じ国でも、季節によって全く違う景色だったわ。人々はバイクで雪道を走る私にととても親切だった。

j: OMG…なんて凄い! 冬にロシアを横断!?
D: また、韓国で出会ったライダーが中国へ引っ越すという知らせを聞いて、彼に連絡を取って、中国をライドするときは教えて欲しいと伝えたわ。2004年のことだった。中国は、ツアーガイドがいなければ自分の自動車や二輪車を走行することが許可されていない国なの。しかも、中国にバイクを輸入できても輸出することができない。彼から連絡をもらい、中国をADVライドするか1週間で決断し、3週間で計画・準備をしたわ。数々の国を共に走ったBMW R1100GSを中国へ置き去りにすることは絶対に避けなかったから、中国へのADVライドの為に必死でバイクを探したわ。そしてBMW F650 DAKARを探し当て、ツアー・テックが協力してくれて大きなガスタンクをオプションで取り付けたの。中国をガイドなしで自由に走れるチャンスなんて滅多



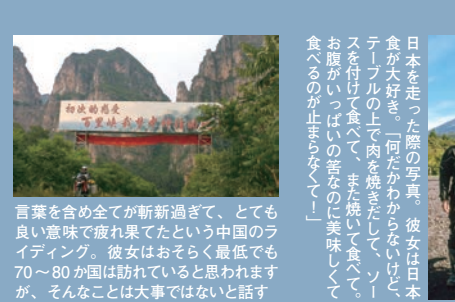
Doris Wiedemann (ドリス・ヴィーデマン) / 50代 / ドイツ出身
田舎のガソリンスタンドで出会った際の貴重な一枚。インターネット・モト・マガジンのライター、Frauke Tietz (フラウケ・ティーツ) (左)と一緒に

にないと思ったから、これは行くかないと直感だったわ。モンゴルでライダーの友人と待ち合わせをして中国国内を走り出すと、ADVで繋がりのある人達が「おいでよ、おいでよ」と言ってくれて。普段、観光客が行かない様な所に案内してくれた。人々は本当に親切で私を助けてくれた。とてつもなく貴重な体験が出来たと思っているわ。中国でADVを終えた半年後、アフリカとモンゴルで出会ったオランダ人の友人が、「冬のアラスカに行ってみよう」と話してきたわ。私はその話に乗ったわ。アンカレッジ (アラスカ州の最も大きな街) で出会った人々に「真冬にドルトンハイウェイ (アラスカのハイウェイ) を走ってる女性ライダーは初めて見たよ」ってね。

j: え? 冬にアラスカをADVライド!?
D: ニューヨークを出発して、最初にフロリダへ行ったの。まずはアメリカの最南端を目指してね。アメリカの最南端・キーウエストから今度は最北端のブルドバイを目指した。2ヶ月後位に、ブルドバイに着いたわ。アラスカで、最も寒かった日は-52℃だったかな。でも、それは気温であって、バイクに乗っているときの体感温度ではないから。極寒だった日は、全身エレクトリック・スーツ (バイクのシガーソケットから電源を取る電熱スーツ) を使用したわ。けれど、万が一バイクが故障した時、最悪の状況を考慮して、7枚の重ね着もしたわ。凍死しない為にね。
j: 言葉が出ないわよ、ドリス! そんな状況下で、泣いたりしなかった? 「何でこんなことしてるのだろう」って自問自答したり…。
D: (ドリス、私の突拍子もない質問に爆笑しながら) もちろんよ。いつも考えて「馬鹿げてる」って思いながらも、家に戻って半年もすると、「こんな日常は退屈だなあ」って満足いかななくて、またADVに出たくなるのよ。出たら出たで大変なんだけどね。
j: ドリス、あなたはADVライダーになるために生まれて来たんだよ!
D: (また爆笑!) 世界はね、実際に足を運んでみたらとても素晴らしいところが多いわ。ニュースや人々の噂で聞くような世界とはかけ離れているのよ。親切な人は世界中どこにでもいて、心から私を助けてくれた。私のADVは出会った人々の協力なしには成し得なかったと言い切れるほど、人々に助けられたわ。出会えたすべての人々と素敵な時間を共にできたことに、本当に心から感謝しているわ。

j: ADVライディングでの達成目標や欲望などがあれば教えてください。
D: そうねえ、とあるプレゼンテーションで、誰かがこう言ったの「ドリス、君は僕たちの夢に生きているね」って。でも私はすかさず言ったわ、「これはある意味私の生活で、夢ではないのよ」ってね。みんな笑ったけど、もちろん、夢を見る為には生

計を立てなくちゃね。多分私自身を要約して表現するのなら、「常時、好奇心が旺盛すぎる女性」とでも表現したらいいかしら。行ったことのない場所に行ってみたくて、刺激的で常に新しいことにチャレンジしたくて。でも、もう一方では、平穏で、家族が健康で、幸せに生活できる…。これは世界中の全ての人々の共通の願いだと思うけれど。多分、私は前者の考えの方が強烈で、世界中の出会えた人々によって今の私を育ててもらったと思っているわ。



日本を走った際の写真。彼女は日本食が大好き。「何たかわからないけど、テーブルの上で肉を焼きたて、ソースを付けて食べて、また焼いて食べて、お腹がいっぱいの苦なのに美味しく食べるのが止まらなくて!」

j: 今までADVライディングをした経緯で、事故に遭ったことはありますか? もしあればその時の状況や心境を教えてください。
D: オーストラリアの大自然のキンバリーという場所で鎖骨を折ったわ。その時は、フライング・ドクターのが来てくれてね、夕暮れのキンバリーの空の旅を楽しめたわ! それでバイクを一時保管してもらっていた牧場に戻り、2週間をそこで療養したわ。2週間も同じ場所で過ごすことは滅多にないんだけど、とても貴重な経験をしたわ。怪我するべき場所だったのかも!
j: ポジティブ〜! しかし、何故骨折したの?
D: ダートを走行中、バイクの重みでふらふらしてしまっただけで、少しスピードを出してスタンディングで走行していたの。そしたらフロントタイヤが石に突っかかってしまい、その瞬間にバイクの後方が空中へと跳ねあがり、私は肩から地面に叩きつけられたの。私の上を回転しながら飛んでいくバイクを見たわ。そしてバイクは普通に地面へ着地。ヘッドライトとスピードメーターが壊れただけで済んだの。そして着地したバイクが私に語り掛けたの、「そこで何してるの、ほら、先へ進むよ」ってね!
j: 何〜〜!! (笑)。でも事故の後、精神的に、またはライディングへの変化はなかった?
D: オーストラリアに行ったときに、特に砂地でスピードを出して走るのがとても怖くなった。もし転んだ時、スピードが出てると激しく飛ぶでしょ、それよりもゆっくり走っていて飛ばないほうがいいじゃない。特に一人でライディングしている時は余計そう思うわ。でも、幸運にもアクシデントがあった時は相棒がいたから助けられたけど。反面、グループでライディングをすると、彼らのペースに追いつかなければと思っ

てしまっていたの。でも事故に遭い、いくらグループでも自分のペースでライディングをしようと思んだわ。
j: 女性ADVライダーに関してどのような意見を持っていますか?
D: 素晴らしいと思うし、走りたい場所を思いのままに走ればいいのよ。たとえそれが世界中でなくても! もし世界を旅してADVライダーに出会ったならば、彼らは皆ファミリーと思った方がいいわ!
j: 女性ライダーが増えていく事に対してどう思う?
D: 雑誌などでもっと女性ライダーを取り上げてもらえればと思うわ。女性ライダーによって刺激を受けて、ライディングに挑戦する女性は少なくないと思う。とある女性ライダーは、私のADVの書籍を読んでくれて、刺激を受け、アイルランドをADVライドしたと教えてくれた。そんな連鎖で女性ライダーが誰かの力になれば光栄だわ。



日本を走った際の写真。彼女は日本食が大好き。「何たかわからないけど、テーブルの上で肉を焼きたて、ソースを付けて食べて、また焼いて食べて、お腹がいっぱいの苦なのに美味しく食べるのが止まらなくて!」

j: 日本をライディングをしたときどうだった?
D: 日本は突然行くことに決めただけで、ヨーロッパから訪れた人々にとっては日本は不思議な国だと思うわ。私はドイツの田舎育ちだから、道行く人とすれ違えば誰でも挨拶をするけど、東京ではそれをしたら変な人って思われるでしょ? 反面、人々はとても礼儀正しくて、親切で気にかけてくれて。でも自分のテリトリーは守っているというか、それがとても不思議に思えた。日本人もドイツ人も、これをしようと思つたらとことんやる、という所は共通していると思ったわ。

ドリスは今まで出会ったことのないADV人間で、不思議に満ちていて、何にも捕らわれない自由な感情表現と滲み出る彼女の世界観は、ライダーのみならず多くの人々を魅了する存在でしょう。極寒のアラスカを物ともせず勇敢にアドベンチャーに立ち向かった彼女の偉業は世界のメディアでも多く取り上げられており、アドベンチャー界で彼女を知らない人はまず居ない、というほどの人物です。そんな彼女とドリスのガソリンスタンドで奇遇稀に対面し、この機会が持てたのは偶然という名の必然と思えませんが、まだまだ世界には腹肝を抜くような女性ライダーがいます。そんな彼女らに会える日を夢見て。さあ、今後のjasmineのハンティングは如何に!?



アドベンチャー ADV

ガールズライダー♡

PICK UP!!

世界にはバイクで旅をする女子ライダーがたくさんいます。そんな彼女たちに焦点を当て、色々聞いてみます!

PHOTO & TEXT / jasmine T Cardwell



jasmine T Cardwell

2006年にカリフォルニア州はサンディエゴに単身渡米。旦那マイケルとの出会いをきっかけに2011年バイクの免許を取得し、アドベンチャー・ライダーに急変身。北米横断にチャレンジするも2回のバイク事故を経て、現在はアドベンチャー・ドライバー (Driver + Rider) として四輪でヨーロッパツアー中。世界の女性ADVライダー事情をお届けしたいと思います。
WEB ▶ <http://www.samurai-rider.com>
Instagram ▶ [advriderjasmine](https://www.instagram.com/advriderjasmine)

アドベンチャー ライディングって?



何が起るかわからない、どんな出会いがあるかわからない…。どんなに険しい山道も、砂漠も、森の中も、川の中も、大都会も、秘境の地も、如何なる天候であろうか、如何なるコンディションであろうか、Two-wheeler (自動二輪) に必要最低限かつ必要最大限の夢と希望を詰め込んで、世界中をどこまでもひた走る…。それがアドベンチャー・ライダー